

舊記

元錄初終十年

六

77
180
5

富山大学

菊池文書

567

元禄元年 八月十年 同日録

一 所載事人持紙居地歩教書

一 津留成身所賜分書印後

一 所載中書子未宗名改長寺誓成身所獨

一 馬也書之宗名是子所改名

一 鉄炮所編方

一 親子兄弟一門所縁者と改述成前の中書付書名中

一 大用山改何宗書と法教と改中書と改人持紙と

一 所載事人持紙居地歩教書人持紙居地歩教書

一 江戸供仕を重くし、城下の百姓奉公に成る事

一 鉄炮の改良と備へて、徳川書出を止

一 火薬の節用と、江戸の治安を維持する事

一 井上と、江戸の治安を維持する事

お上り御村より、江戸の治安を維持する事

一 倉庫の増設と、江戸の治安を維持する事

一 火口舟の増設と、江戸の治安を維持する事

江戸の治安を維持する事

江戸の治安を維持する事

一 江戸の治安を維持する事

江戸の治安を維持する事

江戸の治安を維持する事

江戸の治安を維持する事

一 江戸の治安を維持する事

一 江戸の治安を維持する事

江戸の治安を維持する事

お茶

一 女おきし所用なる茶を御茶と申す

一 茶を馬に乗るを中らふ必き車に上り茶を御茶と申す

一 新開御茶の方と申す

一 而後又茶園を茶の地と記し及御茶園を又茶園と申す

又御茶の茶園を御茶と申す

一 茶の茶園を御茶と申す

一 茶の茶園を御茶と申す

又御茶の茶園を御茶と申す

一 里山七ヶ村の御茶の茶園を御茶と申す

一 改茶園を御茶と申す

一 茶の茶園を御茶と申す

又御茶の茶園を御茶と申す

一 秋入の茶園を御茶と申す

又御茶の茶園を御茶と申す

又御茶の茶園を御茶と申す

一 又御茶の茶園を御茶と申す

一 御茶の茶園を御茶と申す

下江

一、勸告地方公事，又向該處各處自書付與，不取

美沙歌江舟山石江
 一掃出石出々々

一、書寫之印、其子成、乃入身而榮、其和、下化名。

一、治元年江戶殿在代所著書と云々所収より採りて

詠史
萬古流芳

一 所 綢 緞 用 之 爲 妙 之 處 實 在 不 少

一新國新風御振興

一
沙
年
林
巡
一
卷
舟
沙
是
古
畫
沙
傷
沙
紙
面

一粒如中是種之錢砲為法步下成名

一十村抄抄錄總一及身先振師爲市二角

十村清接人新言詞法改如舊清場上之新名

一、本館所刊子方足寶抄人云云

一、收帳時，當十一月八日，當之，及分，每山接現款，其

一、清美用場式日之介、向後一月當矣。御覽。
（以下有若干行文字，因模糊无法准确识别）

朝之野名

一 清地豪貴萬民百姓之福也

之返と改名爲代と改爲とす也

百姓爲之
命曰
相濟
道者
取之
而名
又及
今矣

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

出清書

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

出清書

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 巡檢司事以井上各節狀代由民孫高柳口

一 清國三河縣地之役
中兵村三右邊
沙石能所
山後之山

賞

一 邦國之外に拾歩路領

一 邦國之外に諸地に在る者

一 邦國之外に諸地に在る者

一 津波に在る邦國に在る者

一 邦國之外に諸地に在る者

一 邦國之外に諸地に在る者

一 邦國之外に諸地に在る者

一 邦國之外に諸地に在る者

一 邦國之外に諸地に在る者

中田邦國に在る者

戸出邦國に在る者

六

中田邦國に在る者

中田邦國に在る者

津波に在る邦國に在る者

津波に在る邦國に在る者

中田邦國に在る者

中田邦國に在る者

中田邦國に在る者

中田邦國に在る者

邦國に在る者

邦國に在る者

邦國に在る者

邦國に在る者

津島に改定し中獨の地を流し入部念を死所と仰り味を
五分半増し合他部領が不係多少入部者としてお裁定するに
お係の者は中獨の地をめ新に領上

元禄元
戊辰

二月廿日

御算用場下

北田治右衛門
一丁割加右衛門

津島申し局に并妻子家名を改又ハ寺を移し改換る故に寺に
及割し之に方し向後何れを家名改中してふ叶えハ其
又ハ支配人市川上高部書取次

一寺移し改定所南地川越人など思取寺遠方故に家名と寺とを
改定

改定各別其外子細なく志すも改定中

辰
三月

右に通し作候に系しはを寺に死所と仰り味を

元禄元
三月廿八日

御算用場

北田治右衛門
一丁割加右衛門

津領國中を并せり多し系名を不し振て死所と仰り

元禄元

四月四日

奥村因幡
北田治右

北田治右衛門 一丁割加右衛門

去年如相獨鉄炮所改_ハ有浪人並四方教_ハ寺社方_ハ之_ハ所
法炮_ハ并_ハ所持_ハ不_ハ仕_ハ留_ハの_ハ条_ハ一_ハ之_ハ得_ハ其_ハ之_ハに_ハ止_ハ若_ハ法炮_ハ波_ハ所持_ハの_ハ軍
連_ハ由_ハ有_ハ所_ハ止_ハて_ハ及_ハ到_ハい_ハお_ハ止_ハり_ハて_ハの_ハ為_ハ錢_ハ交_ハり_ハ而_ハ後_ハ一_ハ之_ハ其_ハ
類_ハい_ハ大_ハし_ハ從_ハ交_ハ配_ハ中_ハ未_ハと_ハ者_ハも_ハ未_ハ止_ハ當_ハ市_ハを_ハ獨_ハ支_ハと_ハ從_ハ又_ハ之_ハ各_ハも_ハ
中_ハ各_ハが_ハ法_ハ所_ハ一_ハ之_ハ止_ハい_ハ右_ハ所_ハ改_ハと_ハ情_ハの_ハ隔_ハ年_ハ乙_ハ儀_ハの_ハを_ハ持_ハ止_ハ後_ハ
一_ハ大_ハ重_ハる_ハ中_ハ弱_ハる_ハを_ハい_ハ免_ハと_ハ講_ハし_ハ

元祿
己

五
五
月
廿
日

國大村伊豫
前田佐後
本多安房

生田 治名所後
一石 加右與後

物子兄弟無限一以縁者と後絶仕者ありと書付おこ不足者あり
 と別判之旨ありるに其言の面々然村中々考し中後こそ付
 取重甚難其方たかなと書付こあるにけ残而得之と用ひ条
 足存に^校判すこあるに仍と

元祿二

二月

一、劉加右海
生、田、治、各、海

新水蘆花古技持
十村中

賞

一、度々、後、復、い、得、先、在、と、宿、と、山、方、浦、方、に、い、と、用、心、以、ち、身、を、守、伏、
し、族、を、い、れ、ん、と、市、に、い、け、し、所、が、農、作、に、お、か、さ、家、内、に、お、か、さ、成、者、也、
所、者、と、い、ふ、に、系、に、入、る、中、

いん

一 兼ふに 作せし通生類あはれこの志は雪雪要として仕へるゝなり
作せし急難は播磨あはれ田畑を換さし振へる馬おとしも換
さしあはれ水の時斗り流れてたせり振へる 佐せし然る
二 力一ぬたうひ生類あはれこの志をさすれむさとおひ者方し
と名ふ曲事とて中身の中

一 師領新給ふる播磨あはれ田畑を換さし或は振あはれ一る大を換
さし師領ハ前こゝ通に追ふしそれをも屋におくし師
領ふる師代官より代官の地既分給ふ并同分を中身小
給ふ所ふる其改しと相別給ふと中身大と者方と急なるは
折角調播磨振あはれ時斗り口切と定流流ふるお其こけ
此而も給ふる其改しと名ふ曲事とて中身の中振あはれふし師
領ふるハ前こゝ通に追ふしそれをも屋におくし師
領ふる師代官より代官の地既分給ふ并同分を中身小
給ふ所ふる其改しと相別給ふと中身大と者方と急なるは
折角調播磨振あはれ時斗り口切と定流流ふるお其こけ
此而も給ふる其改しと名ふ曲事とて中身の中振あはれふし師

満ちるハ前こゝ通に追ふしそれをも屋におくし師
領ふる師代官より代官の地既分給ふ并同分を中身小
給ふ所ふる其改しと相別給ふと中身大と者方と急なるは
折角調播磨振あはれ時斗り口切と定流流ふるお其こけ
此而も給ふる其改しと名ふ曲事とて中身の中振あはれふし師

宵太の言ふ伊勢守殿萬葉伊勢守殿の侍同半を更中入

口上

今朝於 師城古懐より師書付好見仕は 作せし歌一首
は其言の但師持家師老中振ふる不似使者も不中道の然るけ
と 作せし歌一首は有斗振師お直も平生は播磨振ふる
教生相止別と世ある後世仕候とおもはる中身自然ハ是なり

先日於 御城に在りて、
 子細情を記上し、
 月、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、
 者、中、外、内、
 御城に在りて、
 子細情を記上し、
 月、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、
 者、中、外、内、

高木伊勢守殿、御裁
 仰上申上知、御使者より来り候に
 由り候と御承知仕候末、候に極々此書先一月より此書
 此書月番御老申、成す私書方、成すこと、其内格し、
 一申候此書に御承知候し、此書生候より、加賀守様
 此書、此書より御承知候、名別と申上候、此書、此書、

一、蘇堂伊豫守殿、玉裁
歸口上入、受、外、市、大、市、口、氣

猪・鹿・鳥・其・所・性・性・性・一・切・商・賣・食・物・不・仕・販・可・也・

生於阿^の水^の之^の域^の大^の師^の月^の付^の之^の心^のが^の法^の反^のは^の法^のする^の也^の一通^の且^の又^のけ^の以^のに^の

付^の高^の木^の伊^の勢^の守^の屋^の教^の堂^の伊^の端^のち^の飯^の法^のの^のを^の抱^のい^の御^の法^の免^のす^の一通^の并^の

右^の師^の不^の害^の之^の域^のに^の付^の法^の返^の答^のに^の執^のを^の集^のい^のに^の付^の一通^の似^の 法^の書^のを^の

下^のに^の付^の領^の國^の中^の急^の急^の可^の相^の觸^のに^の与^の也^の 作^の也^のに^の付^の又^の大^の示^のを^の

右三通指銭をけ方が二お觸り先は後方、早連二お
中ずいふと

元禄二

七月十二日

本多安房

前田信俊

津田守貞

右三通指大老宛をけつゝる寫並に、全に其を御給申
早連二お觸り方の二向歸主と云ふは、此より後、
い御用は、今から御下達にて、仕内若ふ所、成成るゝは、大申
と云ふは、御給申先達、而して、場所、お觸り振と云ふは、上り、
十村、御し、おるゝ御給、不仕、百姓、お、早連、御、
御大老、宛、お、御給、申、次、弟、一、あり、申、
此、二、つ、お、を、と、る、

此、其、お、も、是、の、お、延、り、ける、は、け、場、各、不、念、い、お、成、り、
中、の、お、も、い、各、お、御、文、お、し、或、は、お、大、老、宛、と、上、首、尾、こ、う、お、成、り、
元禄二

七月十二日

津田用基

津田守貞
一、お、刺、加、右、宛、

此、お、も、い、お、成、り、は、け、場、各、不、念、い、お、成、り、
中、の、お、も、い、各、お、御、文、お、し、或、は、お、大、老、宛、と、上、首、尾、こ、う、お、成、り、
元禄二

元禄

一大、御、目、分、宛、お、成、り、は、け、場、各、不、念、い、お、成、り、
中、の、お、も、い、各、お、御、文、お、し、或、は、お、大、老、宛、と、上、首、尾、こ、う、お、成、り、
元禄二

一、高、木、伊、勢、守、宛、お、成、り、は、け、場、各、不、念、い、お、成、り、
中、の、お、も、い、各、お、御、文、お、し、或、は、お、大、老、宛、と、上、首、尾、こ、う、お、成、り、
元禄二

村水橋皮十村御持

覺

[illegible]

元禄二

八月廿六日

忠國治
而利加

村所屬皮沽拉納二十村中

今度は 公儀に拾ふに及ぶは 作しに依りて書か
通一高木伊勢守殿におぼへたふ所は領國中急な至觸
る者ありて 而書就に 作しに則りて書かふに及ぶ
佛前より用ふに及ぶに 佛家中に及ぶに等かろく
てあるは或る佛に申しに及ぶに 佛甚定に及ぶに
守に及ぶに 獨りて及ぶに 守に及ぶに 守に及ぶに

本多安房
田代

卷四
古詩

覺

一、献上げ、看上げ、格上げ、用、仕、何、来、る、も、用、く、み、う、す、を、も、怪、し、い、
 是、ハ、格、格、に、外、何、来、成、大、仕、二、重、く、お、止、ひ、き、く、一、の、仕、中、

一、一 破と箱者、箱其外破上物、二 箱捨形と、三 止何未、四 ちり下寧
と、五 多しすうし、六 急やう、七 用三、八 可仕申

一就其不苦物以就之用一事

一 此之外自今と取かきハ願指押指停心とす

一、外橋と重松重々停止し、常とをくみ、六條と重松とを

一歩と取らば——此嘉物に付おふ——と登る用は多——竹籠をと用事。

一 常とあかハハ箱者改停止將者代ニ仕者高モハ就と

用事

一、只今、日本國を用ひて、軍を本國と用ひ、其外、常々、軍を勝て用ひ、
想ふか、けり、うしの三方、日本國、款、用て、仕事。

一 つけ木向後木 帝不仕麻かゝのたて用事

一 瘡狀如蠟之乳上按之痛何本歟凡一用之藥相之於之ハ不苦也

一車と相立の客主の時格松平用大屋く何本三高も三浦ふ

一、おと株上拾て得るに、仕向未成なりと申す。但、橋守、過へり

たゝ通本年十一月分改之可也字云

元禄二

八月

松急所用申上留止到在留止此物早く了取致

當年按地預設河川不足其大分者十村總之八村敷ヤ
町當年足之村數多者十所用於大分中其得見其止
又按地預設河川不足其大分者十村總之八村敷ヤ

いづれより水伊勢守殿は定、守書師相の後、故交友中
弱はるる書通におちの振に仕るに仰候、系得領國中
名なるうゝ弱中、托者あり、師書に依り、大是守
官指裁し、官支、死所、未、と、岩重、と、中、中、而、更、と、上、と、い、
元禄二
己丑

十月十日

本多出立所
奥村伊勢
前田佑俊

其四治を馬
一る則か右馬

馬にあて中、ある、か、中、裁中、と、候、に、名、に、中、を、中、石、上、に、候、
吟、味、中、に、仕、者、有、し、い、て、中、に、中、多、か、矢、信、濃、殿、に、仰、候、に、

而、に、候、は、吟、味、中、に、仕、者、有、し、い、て、振、子、書、上、中、に、候、多、中、に、
托、者、中、に、不、吟、味、に、仕、賜、か、其、果、お、中、に、其、方、元、可、為、不、念、
留、う、得、其、さ、い、に、書、状、に、所、を、判、形、列、付、に、先、に、通、に、
是、か、つ、中、に、候、と

元禄二
六月廿

馬則加右馬
真田治之

村石源は、中、振、持、中、村、中、

此、ら、中、に、候、か、中、名、

ま、す、い、う、中、

さ、い、う、中、
る、う、中、

太、く、外、に、中、に、名、中、に、中、に、念、と、入、在、に、將、男、并、伯、中、其、外、

免

一、露白鳥ルビ生ニ替リ後ノ活キ鳥ニ生ス事
大ニ通ス也ニ 作ル也ニ 桑ニ 以テ 生ス 事ニ 上ニ

元禄二年
庚午
六月十四日

前田對馬
津田玄暢
奥村周煥

眼
眼初字在血
伴 七
大石
生回
石
山村
个井

相師不曉矣仕李公家

御茶師
下下
好
年
分
名
村
下
年
無

かゝ
る

中氣用陽古陽氣之至動於八寸能十寸上
於陽氣之至動於八寸能十寸上

辛七月庚午

中氣用供

仝

文如三子也

三才圖

十打

あて中志るし
る別紙
へお気をつけ
角古かた

予に於て遂に味の一隅に及ぶ事なく、随分
お尋其故の言上なるは 作も亦う其言に似し

元禄二
六月廿三日

加賀信濃

一、別加右馬殿
中、四治右馬殿

只今近世民の書中、故自今以後、其言をなすし、
通に振る書中、中と似せし、御筆寄に、中、は、る、の、
と、は、る、と、い、ふ、上

元禄二
七月廿日

御筆用書

生、四治右馬殿
一、別加右馬殿

以て

一、他國又、隔、あ、い、その、も、旅、人、相、知、り、別、て、故、に、絶、ち、あ、い、あ、
細、中、は、或、り、は、其、旅、人、は、故、に、無、し、旅、人、と、者、を、急、を、
予、に、知、中

一、旅、人、お、知、り、別、て、其、在、所、式、に、其、村、に、い、り、を、送、り、お、し、来、り、村、
又、来、り、宿、に、お、後、り、は、皆、明、く、旅、人、中、旅、人、と、い、て、
不、知、り、宿、に、お、り、別、た、と、他、に、村、に、知、り、と、い、は、る、に、其、之、
に、村、に、一、面、に、知、り、て、及、お、し、い、に、其、之、を、一、う、さ、き、の、
送、り、を、宿、に、先、に、村、に、知、り、去、り、以、毎、一、に、先、送、り、お、し、中、村、に、
ハ、不、及、中、旅、人、来、り、在、所、一、送、り、を、い、所、に、者、
同、中、に、
年

一、宿、に、下、り、送、り、も、の、者、し、時、に、お、し、を、更、に、一、中、に、其、之、
宿

百とあてしあるしのかき年外者いかに所持仕者ありしか
大津村持し物他下あるなり持上るに似たり二五あつた味仕志は
のうき所持仕者ハ不及りてぬる者も無きと申す所録中とい
所々年々之をいひて留志はのうきとぬるあつたかた志は
の扱といつ何ふ年々もこの持上る係一掃ある事不及たりとい
るも委細をいふは自村一割、私に玉代ある事多し、か左
大津村持し物他下といふは所持仕者自止し中といふ

不あううきとてすし

大津村 出右殿

不かううきとて弱いぬ

口村 忠助

不かううきとて弱きさる

土佐村 五右衛門

一云り

右に外にかなる不扱持し物他下、所持仕者年々仕すに其の事ある
由案内中といふこと

元禄三年

大津村 持し物

其の四は左殿
其の別は右殿

土佐村 又八

旅人お煩中別ハ其の所留る事と申す其の所と申し申す事
自れ死去仕りて是又申述てお別ハ他領分宛送り仕
て送り申すお別ハ其の所と申し通中自るに申し申す事

元禄三年
九月廿六日

所録用場下

乙

志田信之助殿 万別加右殿

昔年江戸所供并四月代り其外他供仕付使也母亦印用
遠所へ仕代へて石仕申下候下南未成二石仕但帳を以て
ハ主人の為給申下候事其後及申下候事及申下候事
事公之申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
日用仕者多し申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
り申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
配へて申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事

且又申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事

元禄記
辛未ノ

二月六日

志田信之助殿
北村云々

志田信之助殿
万別加右殿

昔年江戸所供并四月代り其外他供仕付使也母亦印用
遠所へ仕代へて石仕申下候下南未成二石仕但帳を以て
ハ主人の為給申下候事其後及申下候事及申下候事
事公之申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
日用仕者多し申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
り申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
配へて申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事
申下候事及申下候事及申下候事及申下候事及申下候事

元禄記
二月六日

志田信之助殿
万別加右殿

張氏村あり十村あり使持中

公義我鉄炮の事市改より今一年所性上より人々
并中野方より改有る事と云ふ及山内より鉄炮改有る事と云ふ
斗山向端より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
赤松より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
三丹宛調より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ

一、斗山向端より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
赤松より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
斗山向端より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
赤松より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
斗山向端より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
赤松より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及

一、斗山向端より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
赤松より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
斗山向端より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
赤松より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
斗山向端より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及
赤松より一山所通に鉄炮一所持仕候事と云ふ及

元禄
二月十六日

山内治之
百圓加右

張氏村あり十村あり使持中

張氏村あり十村あり使持中

張氏村あり十村あり使持中
張氏村あり十村あり使持中
張氏村あり十村あり使持中
張氏村あり十村あり使持中
張氏村あり十村あり使持中
張氏村あり十村あり使持中

此の如き事しりし向後之邊に遠く急をやくとの及ふ事の内
一右に之を自らしむ火事所か先及ふ事内其新編あり後火事
の者より又の費金に改むる事あり其子に之を味とて金に
おまへし事あり其新編に之を判形におまへし事あり

元禄記

三月十三日

三洲か右邊
其田治之

村の破法は其村十村中

井上之太常監鐵改法より就に 何れに之を以て其是は怪し
此中其史末し之れと人定を非不依何れ所用と云ふ事
之常法とて仕る事あり其邊中其田治之村因幡後之
於此傳ふたし其田治之村の如く復し其田の如くや——其者捕縛

一通と雖も其法は式ハ捕中判り其法は人定あり式ハ昔人と其
式ハ何れ方通國人川系より其法を非不依何れ所用と云ふ事
其田治之村の如く復し其田の如くや——其者捕縛
自分より用事お伺池を修成するハ其より其田治之村の如く
其田治之村の如く復し其田の如くや——其者捕縛

元禄記
三月廿日

其田治之

其田治之
三洲か右邊

越中藤原家の倉より其村の古城より其田治之村の如く
其田治之村の如く復し其田の如くや——其者捕縛
井上村

右所林之指下荊枝木荊中及新中者方いへる臨所林と云
いへるいへる指し方いへる方いへる元其申り然し利川節也
水用外も指し方いへる村いへる方いへる元其申り然し利川節也

元禄
三月廿七日

所景用場

其田治之海
る別加有馬

近幸所いへる火中盤之結之去来金銀大火の屋火と云い者方いへる其上
在いへる方いへる火中一其いへる元其申り然し利川節也
いへる元其申り然し利川節也
事いへる方いへる元其申り然し利川節也
おるいへる元其申り然し利川節也

吾所治之方其少は其元其申り然し利川節也
いへる元其申り然し利川節也
いへる元其申り然し利川節也
いへる元其申り然し利川節也

元禄
三月廿八日

所田依後

横山の筑後
村井いへる
奥村因場
奥村伊豫
本多安房

其田治之海
る別加有馬

廣德
 十
 村

乾坤萬古

[illegible]

己未年四月

田中村
海右邊

和泉村

去元三年

五九村

長
之

戶部村

又^九
八

御案用場

諸次席様へ多々席様御書生に候へう交わは戸出老申上
 之御達より此方御目書お田佐後度出宅より諸頭へ御
 後何段御申、中より候へ出給方へ候各々十村より中より
 候へう御達より此方御目書お田佐後度出宅より諸頭へ御
 御祝詞十村より此方御目書お田佐後度出宅より諸頭へ御

元禄記

二月十日

清衆用機

生田治之助
る副加右馬友

口上しる人

日蓮宗に因不立不施に成法意なる佛刹禁に就て小湊
証生寺碑文谷法華寺谷中威應る此田宗と号不立不施
之形多を成之に自今家此田宗堅く傳ひて 仍自之宗と
お改め向佛非田宗と云々受不施に成又ハ他宗と云々心次
才改丁丁の似上

元禄記

四月五日

似上

日蓮宗に因不立不施に成法意なる佛刹禁に就て小湊
主形改めたる今度佛傳心と 仍身と法意と伊勢守殿
佛堂と書りし中越の佛領國中望み觸りしと持たる
に成下佛堂の別 以是寺官を以て之を之と云々記
之形と云々也 此の者元と云々ハ向佛宗と云々之形人亦云々
之形と云々味甚然宗門改奉りし中宗所と書りしと 同右
身に中と云々持たる之と云々

元禄記

辛未

二月廿六日

前田法後
本多安房

生田治之助
る副加右馬友

事人をも不名を振一役中

右の通はてしなく西に下る者共来ると近海に少くも
遠く味はれ状をく得る用と来て布いて判るべきもの

元禄記
幸未

六月十七日

生田治之
三割加有也

村の磯段は持物十村中一と云共

大いッス

一たけ
き大武寸の内

一回足
ふそく

一耳
まやうり

一教者もくと思つめをわををたいなる

一尾生れ身なるにふし尾を無し

一毛色ハ黒黒ク黒赤毛ハ黒アめいろを毛ノ大分後を

少家白毛を中して不苦同ハ一毛ノ大を中

右の茂男大いなるなる中

元禄記
六月十七日

右の茂男大いなるなる中

別紙是等と通大所用とるに依り各々科も族ハ不及中更に交
証所との所持仕者方しゆり子細と云得右茂男中おる大い
にて依りて通とる方と持越ゆこと

七月六日

前田依後

三千五拾石

去年二丁水納米高

新白
四百石

計米三千四拾石

但四百石米七拾石より市米貳圓より三圓

福呂市米納高

一丁

市米納高
但四百石米七拾石より

但四百石米七拾石より

市米納高
計千四百石

壹圓八百石横丁

八百五拾石

大徳他内諸組定食市米納高
壹圓 毎年一横丁

千四百石

計米二千四百石市米納高
但四百石米七拾石より

三日市米納高

一丁

市米納高

三百五拾石市米納高
但四百石米七拾石より

但
三百五拾石市米納高
但四百石米七拾石より

市米納高
三千五百八拾石

四百五拾石市米納高
三百五拾石市米納高

四百石

元禄三年市米納高
計二圓より、口米八百五拾石より

千石

市米納高

千五百石

大徳他内諸組定食市米納高
三圓 毎年一横丁

市米積高

六千石

四百六十石ノ國寺園

四百六十石ノ國八百石積

四百七十石ノ國千石積

四百六十石ノ國九百石積

り
五千石

元禄三年佛米納付諸米高
但四百六十石を國四百七十石三國
一四國より、加へて四國より、
佛米千三百石二十石所より

五千石

當年入佛米納付米高

外
千石積

佛米納付諸米高
定化食積米より

立野佛米納付高

佛米四百石、五百石を國

一
五石

佛米積高

八百石

り

四百石

當年入佛米納付米高

外
四百石

四百石

け米入二十石所より

中國佛米納付高

佛米納付

四百石、五石を佛米納付
四百石、五石を佛米納付

但四百石、五石を國六國

一
五石

市米積高

四千四百石

り

九百石、五石を佛米納付

寺園七百石、五石積

元禄三年佛米納付諸米高
但四百六十石を國四百七十石三國
一四國より、加へて四國より、
佛米千三百石二十石所より

三千五拾石

去年二月内米高

新白
四百石

計米三千内米

但四百石米也拾石之内米穀或園之内米

福昌清苑清米納高

一臺

清苑四百石米拾石

但四百石米也拾石

市米横高

計千四百石

豊國八百石横高

八百五拾石

大徳他内清苑米納高
豊國、毎年横高

千四百石

計米三千内米
但四百石米也拾石

三日市清苑清米納高

一四

清苑内

三百石米也拾石之内米

但
三百石米也拾石之内米

市米横高

三千五百八拾石

四百石米也拾石之内米
三百石米也拾石之内米

四百石

元禄三年清苑清米納高
計二國之内、口足八百五拾石之内米

千石

去年二月内米高

千五百石

大徳他内清苑米納高
計三國之内、毎年横高

北千五百拾石

け来入一市以佛花他四百柒、長拾石、以花寺の
三百柒、長五拾石、同之

佛花佛花佛花

一或

佛花肉

四百柒、長拾石、以花寺の
三百柒、長拾石、以花寺の

他

四百柒、長拾石、以花寺の
三百柒、長拾石、以花寺の

市米横高
四千五百石

四百柒、長拾石、以花寺の
三百柒、長拾石、以花寺の

子百石

元禄三年市米他拾石、以花寺の
以三國、以佛花寺、以花寺、以花寺

北千五百石

南千二百石、以花寺、以花寺

佛花
九百石

元禄三年市米他拾石、以花寺の
以三國、以佛花寺、以花寺、以花寺

一或

他四百、以花寺、以花寺

佛花四百、以花寺、以花寺

鴨島佛花、以花寺、以花寺

市米横高
四千石

北千五百石、以花寺、以花寺

三百石

元禄三年市米他拾石、以花寺の
以三國、以佛花寺、以花寺、以花寺

子百石

北千二百石、以花寺、以花寺

元祿記

八月十八日

沸氣用湯

志田治之助

馬訓加在後

右清算用場法残高并高園所法を以て先年同場が法を以て
紙面より通算するに依りて得る字體より若干の差を以て
依りて之より大抵諸般切に仕連判と爲す所二冊宛の差を以て
案文より以て巡状及び命令判紙より差を以てし各差が一冊宛に

元福記

八月廿二日

印

赤田名之場

馬訓加左

社水礪守村中投物中

御尋自十一

一、改化、新、高、思、高、會、新、主、師、事、約、伊、友、日、勝、殿、師、相、司、長、井、七、爲、殿、
近、友、新、紅、無、殿、代、師、師、師、海、殿、新、少、師、法、事、者、入、以、予、殿、角、中、及、
化、師、中、後、方、思、師、中、事、場、引、中、由、

一 沛改化竹氣之中國之沛舍亦亦之沛寺亦亦之沛府新助殿而檢同山本寺

一 師法化家化家水哉長為敬
衡波形如永水又重野忠
齋敬化家入師化家師用化家助化家中化家化化家居化家也化家為化家敬化家重化家所化家中化家以化家成化家忠化家齋化家敬化家中化家

